

【発表要旨】

1-1 知覚トレーニングに基づく中国語発音教材の開発 – 音声産出における効果の検証 –

劉羸・九州大学（准教授）

董玉婷・大阪国際大学（准教授）

本研究では、日本語母語話者の中国語学習者を対象として、学習効果を高めることができる発音教材の実現を目指している。2020 年度までに、教材の第一版（ver1.0）が開発されたほか、知覚（perception）の側面における学習効果が確認された。その後、未解決の問題を踏まえた改良を重ね、第二版（ver1.1）が作成され、知覚の面における残された課題が解決された。一方で、知覚のみならず、産出（production）の側面における効果を検証する必要があるため、本研究の着想に至った。具体的には、発表者らは同じ大学で中国語を学習する日本語母語話者を対象として、第二版を利用しないクラス（通常通りの授業）を統制群とし、利用するクラスを実験群とした。それぞれの結果を統計的に比較し、第二版の効果を検証した。その結果、多くの声調、母音と子音において教材の有効性が認められた。

1-2 中国語初級段階における文法学習の意義 – 品詞と文成分の知識 –

山口直人（大東文化大学）

中国語の初級段階において、文法の体系的な学習は行われないことが多い。初級テキストの多くは発音に始まり、いくつかの文法事項の習得を目的とした会話中心の本文を学び、語句の並べ替えや穴埋め、作文の練習問題などを通じて中国語の基本構文を学ぶ作りになっている。もちろんテキストでは文法事項の習得に重きを置いているのであるが、文法の体系的な知識、特に品詞や文成分を扱ったものはほとんどない。しかし、初級から中級以上に学習を進めるうえで、品詞や文成分の知識の欠如は学習者が思っている以上に深刻な弱点となる。発表者は日頃の教学体験にもとづき、学生が品詞や文成分の基本的な知識を習得することは、文の正しい読み方につながることを指摘する。そして、そのことは学生の会話能力や文解釈能力の向上にプラスに働くことを主張する。

1-3 類書『白氏六帖』による白居易「百道判」の本文批判

大淵貴之（鹿児島大学）

白居易に「百道判」と通称される作品群がある。「判」とは文体の一つで、司法・行政の実務、或いは倫理・経学上の諸問題について判断を示したものを言い、「道」はその助数詞である。科挙の一環である吏部試に於いて、その作成能力が試された。「百道判」もまた白居易が吏部試受験の事前準備として作成したおよそ百道の模擬判である。その本文は主に『白氏文集』諸本によって伝わり、文集の校訂作業が積み重ねられるなかで「百道判」の本文研究もまた尽くされた感がある。

報告者は、白居易自撰の類書として知られる『白氏六帖』を「百道判」の本文批判に積極的に活用することで、従来等閑視されてきた文字異同の重要性が浮かび上がり、その内の幾つかについては『白氏六帖』を根拠として解決することができると思う。例を示して諸先生方のご批正を請いたい。

II-1 「夢」と「物化」 — 「胡蝶の夢」説話に関する新考察—

榎崎 洋一郎（北九州市立大学・非）

『莊子』齊物論篇末の「胡蝶の夢」の説話は、古来きわめて有名であって、思想・宗教・文学・美術、さらには昨今のサブカルチャーの領域にまで、幅広く影響を及ぼしてきたものである。しかし、その意味するところについては、今日でも議論が継続中であり、実のところ、いまだに不明のままである。本発表では、まず、本文の一部に注の混入がみられるとする劉文典の説（『莊子補正』『三餘札記』）を採り上げ、その妥当性を再検証する。しかるのち、あくまでも原文の意に即し、徹頭徹尾、「物化」とはいかなるものであるかを説いたものとして（そして、そのみのものとして）、この資料を読み解いていく。それは、所謂「万物斉同」の思想との連関性から、この説話をきっぱりと切り離すことによって、長きにわたり晦まされてきたその「真意」を、掘り起こそうとする試みでもある。

II-2 聶双江の帰寂思想再考

伊香賀隆（佐賀大学地域学歴史文化研究センター）

江右王門の聶双江（名は豹）が提唱した帰寂思想は、動静一如・渾一無間の心学を説く王陽明の思想とは本質的に異なるものとして、陽明門下の高弟たちから激しい攻撃を受けた。現在においても、「陽明学の後退」（荒木見悟先生）とされ、その思想は現実社会では力を発揮し得ない観念論であると論評されることも多い。そしてそうした低評価の根拠の一つとされるのが、双江の政界における最晩年の失脚である。とりわけ『明史』聶豹伝の評価は厳しく、双江に「応変の才」はなかったとし、皇帝を恐れて狼狽する姿が強調されている。ただ、それ以前の生涯に目を転ずれば、厳しい軍事・政治の現場で数々の功績を挙げ、『明史』における最晩年の記述にしても、真実であるかどうか疑わしい所がある。本発表では、先行研究をふまえた上で、双江の政治的実績及び思想形成過程を検討することで、その帰寂思想の意義を改めて問い直してみたい。

II-3 王鐸の臨書に内在する法帖への懐疑思考について

大野紘暉（鹿児島大学・院）

明末清初の書家王鐸は、張瑞図、倪元璐、黄道周、傅山などと同様に明末清初を代表する存在である。王鐸は書聖王羲之、王献之を宗とし、生涯に渡り古法帖の臨書に励んだ。

王鐸の臨書作品は数多く現存しているが、彼の臨書は外形に捉われない自由奔放なものであり、これは董其昌が主張した精神主義や形似主義の否定という理論を踏まえた書風である。従来の先行研究では、王鐸自身の題跋等に記される書論を扱って論じたものもあるが、王鐸自身の具体的な精神主義について

の言及があまりなされていない。また、王鐸は自身の文章中で法帖に対する懐疑的な見解を示しており、この見解は臨書における形似との間でどのように捉えることができるのか。

故に、書や法帖に対する王鐸自身の考えを取り上げ、彼が展開した論理を詳細に検討し、加えて董其昌との相違点・共通点も抽出した上で、独創的な王鐸の臨書の根拠を探るのが本研究の狙いである。

4 方紀生の新資料に関する一考察

一周作人宛書簡から窺う日本占領期における中国文壇のダイナミズム

鳥谷まゆみ（北九州市立大学）

方紀生（1908-1983）は、日本占領期（1937-45）に駐日留学生監督として東京に赴任した。文学好きの方は青年期に周作人と面識を持ち、周を師と仰いで中国文人らと交流した。1930年代に日本留学した方は、周を介して日本文人らとも親交を持ち、帰国後、日中の文学作品や翻訳を自身が編集する中国の文芸誌に発表した。1944年には『周作人先生のこと』を編集、東京で出版した。戦後、文化大革命で投獄されたのち名誉回復されたものの、その存在は日中関係史の溝渠に埋もれつつある。

方紀生における日中文人との交流手段の一つが文通であった。近年、周家が所蔵する方紀生書簡データを提供いただいた。そこからは従来知られていない日本占領期における中国文壇のダイナミズムが窺える。また、それを裏付けうる日本文人からの書簡も、日本在住の方紀生令嬢のもとに残されている。本報告では、周作人宛ての方紀生書簡について、翻字、翻訳の一部を報告するとともに初歩的な考察を行う。

5 近代中国における「童話」の誕生——周作人、「児童観」そして日本をめぐって

汪憶霏（九州大学・院）

近代中国を開いた五四運動（1919）が「個人の解放」を宣言すると同時に、それまで一個の独立した人格とは見なされていなかった「児童」もまた新たに認識され、人々は「児童」の精神生活に改めて関心を寄せることとなる。児童を尊重し、児童の立場からその心理を真に理解するために、彼らの嗜好に合った“児童本位”の「児童文学」を提供することの重要性も次第に共通認識となっていく。またそうした背景の下、「童話」が当時の小中学校国語教科書にも多く採用されるようになる。周作人によれば、「童話」という言葉自体は日本から伝来したものであり、新中国では1920、30年代を通してこの新名詞「童話」をめぐる議論が絶えず巻き起こることになる。本発表は、二十世紀以来の中国における「童話」という言葉の誕生、その概念の成立また内在する種種の問題点を繙きつつ、中国の近代における「児童観」の変遷との関係を考察しようとするものである。

6 植民地文学としての台湾シュルレアリスム 一楊熾昌「炎える頭髮“詩の祭禮”のために」について

頼怡真（九州大学・非）

1920年代後半から1930年代の日本において欧米のシュルレアリスムを紹介したのが『詩と詩論』（1928年9月-1931年12月）であった。当時、台湾人留学生たちが日本から帰国すると、台湾でもシュルレアリスムが流行する。台湾シュルレアリスム詩の結社に「風車詩社」（1933年10月-1934年12月）がある。

その中心人物は、水蔭萍などのペンネームを用いた詩人の楊熾昌（1908-1994年）だった。従来、楊の詩には西脇順三郎（1894-1982年）や北園克衛（1902-1978年）、堀辰雄（1904-1953）、佐藤朔（1905-1996年）からの影響があるとされてきた。このように一見すると日本のシュルレアリスムの模倣に見えるのだが、風車詩社が活動していた同時代の台湾が日本占領下にあったことは看過できない。本発表では、楊の詩における「檳榔子」という言葉に着目し、それが日本のシュルレアリスムの単なる「横移植」ではなく、日本の台湾占領の暗喩となっていることを論じる。